リモージュ大学への留学 - 明治学院大学の場合

(2006年 3月27日 於 名古屋工業大学 国際交流シンポジウム)

司会(福田功一郎) 次に明治学院大学の工藤進先生にお願いいたします。工藤先生はフランス語を中心とする言語論がご専門でいらっしゃいます。本日は「個と普遍」という題目でお話しいただけるときいております。よろしくお願いいたします

工藤と申します。今日はフランスの教育制度について、それから私たちか 20年ほど前から行っている、主に留学生の送り出しに関すること、また、ここ(名工大)からリモージュへ行っている人がいまして、河村くんといいますが、彼とこの間会って食事をしていろいろ考えたことがありました。それについて話してみたいと思います。

先ほどジャン=リュック・リガル先生がむこうの学制についてお話しされたので、ここはちょっと遠慮いたします。フランスの小学校のところが切れていますが、日本とはかなり違います。小学校から大学までご覧になればわかるように、日本は小学校か 6年制ですが、フランスは5年制。中学校か 4年、それから高等学校か 3年。日本は6・3・3でフランスは5・4・3ですから、足せは 12で同じことになります。フランスでは(日本で昔行なわれていた)飛び級というのがまだ行われていまして、小学校の時に成績のいい人とかがどんどん先に行ってしまうことがあります。だから、16歳ぐらいで高校を終えるということは珍しくありません。高等学校は3年間あるわけですが、それから上、表の左側の方が大学コースです。右側の方が先ほどから話が出ていますグランド・ゼコル、日本語で訳すと «大学校» ということです。さきほどリガル先生がおっしゃったように、これは一種の実業学校です。そして、これはとっても入るのが難しい。

フランスは高等教育に関しては、こうして二重の構造になっております。高等学校の中に「プレパ」があります。これは日本語に訳すと «予備校 » とか «予備級 » ということになりますが、ここにはかなりできるエリートが高校に残って勉強します。そして、そこに属さない人が大学に「進学する」わけですね。名古屋工業大学はどちらかというと、このグランド・ゼコルの範疇に入ります。 このプレパとい

うところに入った人は、普通は2年かけて(一年で受かる人もいるけれども)高等学校の予備級で集中的に競争試験(コンクール)の準備をする。そこで準備しても入れる人は少ないですけどね。試験はとっても難しいんです。グランド・ゼコルというのは、そんなに難しくないところもありますが、ふつう東大どころの話じゃなくて、東大の5倍から10倍位は難しいという、本当にエリートを養成するためにある制度です。ところでグランド・ゼコルに受からなかった人はどうするかと言うと、プレパで大学の2年間を修了したと見なされるので、学士課程3年目に編入できる。こういう人は学士課程は1年で終わって、その上の修士課程に進めるという構造になっています。 ユニヴェルシテL(リサンス)は学士号を取るための3年間、それを終えるとM課程、マステールと言いますが、マステール・アン(1)とドゥ(2)が修士の1・2ということになります。ここで今改革が進められていて、旧課程から新課程に移って少しごちゃごちゃしているんですが、日本と比べるとよくわかる通り、むこうは大学か 3年間です。修士課程か 1年2年、その年ごとに論文を出して合格しなくてはいけないのですが、終わった人はDという、ドクトラ(博士課程)か 3年間あります。

フランスの高等教育は一般に授業料はないことが日本とのとても大きな違いです。授業料どころか博士課程に行く人は奨学金がないと、もうとても続けられない。ここに入るということはつまり、奨学金をもらうということです。それから先ほどのグランド・ゼコルに入ると給料をもらえるんですよね。授業料はもちろん払う必要はないし、グランド・ゼコルに入ると多くの場合、奨学金という名前、あるいはそれ以外のいろいろな名目で学校によって少しは違うと思いますが、返す必要のない奨学金がもらえる。初任給程度の補助があります。 フランスの大学の制度は今言ったようなことになっていて、大きな違いとは、日本やアメリカではお金を払わなければということになっていますが、フランスはそういう構えじゃないんです。学生は国のお金で養成しなければいけない、と。授業料という名前がないんです。登録料というのはあります。登録するときにお金がかかるのですが、1年に3万円位のもので、日本やアメリカみたいにアルバイトしなければ行けないということはない。重いアルバイトなんかしていると、とてもついていけないんですよね。ものすごい量の勉強をやらなければいけないんですから、アルバイトをしている暇がない。その代わりに授業料をなくすという、ここのところが交流をする際の考え方の違い、価値観の違いですから、こちらからふらっと「アメリカにしようか、フランスにしようか」なんて感じでフランスへ行った人は、とても大きな違いに気がつきます。もしもヨーロッパへ行く人は、ヨーロッパ的な考え方、つまり教育というも

のは受ける人が授業料を払うのでなく、国家が金を出して養成するという考え方、これについていくというか、こちらもそれに応えていかなければならないと思います。 今、フランスはストライキなんかやっています。ストライキしている人たちは左側(左翼という意味ではなく、図の左側)の人なんですよね。右側のグランド・ゼコルに入った人は、一種の公務員ですから、ストはできない。今の問題は主に左側の人に関係することで、右側の人には関係しない。フランスの高等教育はこのように二重になっていて、我々が日本から見ていると「フランスは学生が騒いでいる」と思いますけれど、フランスの学生は少なくともこう、立場としてはっきり 2 つに分かれています。フランスの高等教育機関に留学するときは、授業料がないという点は同じですが、フランスではエリートとしての意識をつよく持っている人たちとそうでもないという人たちに分かれていますので、そこをよく考えて行かれた方が良いと思います。

また個別的なこととして、特別に興味があったわけでもないのですが、たまたま偶然が重なって私は今の交流的なことに携わることになったんですけども、私たちの大学には島崎藤村という先輩が卒業生の中にいます。島崎藤村は 1913年、第 1 次大戦が始まる前に、事情があってフランスに行くわけです。間もなく戦争が始まって、パリの下宿にいた時、そこのおばさんが、パリはもう危ない、私の故郷に伝えてあるから避難(疎開)しなさいということで、確か7月に戦争が始まるんですが、たちまちフランスは敗れて、パリに敵が迫ってくるという時に逃げてリモージュに行きます。8、9、10月と 3 ヶ月くらいリモージュに滞在します。11月に、もう大丈夫だろうということでボルドーをまわってパリに帰ります。われわれの学校にはこうした偶然がありました。 僕は別に、島崎藤村って興味もなかったし、ほとんど読んだこともなかったんですが、大学の時の先生に河盛好蔵という、文化勲章をもらって5年ほど前に97歳で亡くなった先生がおりまして、その先生がとても島崎藤村が好きでした。彼は 80歳位の時に、藤村がフランスでどうだったかなど調べていました。僕は1986年にフランスに一年いました。リモージュじゃなくポワチエというリモージュから西へ100キロ位のところにある古い町で、僕はそこで研究員をしてたんです。その20年ほど前、僕はそこで学生をやっていましたが、その頃の優秀な友人が、最初はパリ大学で先生をやり、ポワチエ大学に戻り、それから86年には彼の故郷のリモージュの大学でギリシャ語の先生をしていました。そんな頃、河盛先生がリモージュに、島崎藤村がどこでどんなことをしていたのか調べに来られたんです。僕は教え子ですからいろいろ手伝いました。たまたまさっき言った僕の友人に連絡をしたら調査がとても上手く行き、河盛先生は喜んで『藤

村のパリ』という本を書いて、読売文学賞を受けられた。そういうことがありました。 その時まで僕はあまり何も考えていませんでしたが、友人から「そんなエピソードがあるんだし、あなたのところの日本人の学生をこっちに送ったらどうか」という話がありました。「なるほど」と思って、87年に 4 年生の女子学生を一人送った。さっき言いましたように、フランスの大学は3年、日本の大学は 4 年なんですよね。大学生としてむこうに留学するということは、語学をやりに行くわけじゃないんです。大学は専門を教えるところですから。むこうではいわゆる語学の授業は大学以前に終わっている。語学学校は向こうにもいっぱいあります。そこに行く事を留学とは僕は考えない。むこうに行くのだったらちゃんとしたところに籍を置いて、専門をやらなきゃいけないと思っています。その一人が行く時に、どこに籍を入れるのかということがありました。僕たちのところは文科系の大学なので、その子の場合は4年次に行くことにしたんです。ということは 3 年は日本で終わったということで、向こうの3年間をこちらでのもので換算する。リモージュ大学はそれを認めてくれたんです。こっちでやった 3 年をむこうでやったのと同じように換算してくれた。だからマスター課程に 4 年の時に入れた。その子は一人でしたがとても一生懸命やって、町の人や大学の人に非常にかわいがられて帰ってきました。それが前例となって、こっちで 3年を終え、4 年目の秋にむこうへ行くということが始まりました。

最初は一人だったけれど、今年の秋は 7人行くことになっています。これまでの人数を数えると、これまで正規留学生が 86人、卒業生も行っておりますので、それも合わせると今年の秋で 90人を超えます。87年に始まりましたので、2006年にはちょうど 20年目になります、2年、3年過ごして博士課程の人もいますので、合わせると延べ 100人を超えます。 こういう風になるとは僕もまったく予想していませんでしたが、この間ふと考えたら「もう、20年目だ」ということに気がついて「20年だから何かしようかな」とも今考えています。これは僕の業績とかではなく、まったく偶然の連続で出来上がった制度です。みんなとても満足していろんなことをして帰ってきていますので、うまくいったんじゃないかと思っています。

なぜうまくいったのだろうかと考えてみると、とにかくさっき言ったように、外国に行く場合は日本を中心に考えやすい。自分の経験でものを考える。常識というのはこういうものだろうというように考えてむこうへ行くわけですが、むこうではとても驚くことがあります。礼儀でも何でも、いろんな生活面でも、日本で考えている常識とは違う。そういう時にいちばん日本人の誰でもやるのが、だいたい外国はこうだから、こういう風に言ったほうがいいとか。それが 3 分の 1 か半分は間違

いなんです。そうじゃない場合が結構あります。こういうことは日本でいくら語学をやろうが何をしようが、身につかないものなんです。むこうに行かないとわからない。わからない時には、正直に言うしかないんですよね。嘘をつかないということ。何かを言ったらそれを守るということ。相手がいいだろうと思って何かを言うんじゃなくて、自分はこういうことができる、と。できなかったらできない、と。そうするとむこうの人から信用されるし、不信の念を抱かれることはない。たぶんバカ正直というか、嘘というのももちろん悪気があって言うわけじゃなくて、むこうの人にとっていいだろうと思ってやることが多いわけですが、それは裏目に出ることが多いですから、嘘は言わない。言ったことは守る、と。言うことは簡単ですけど、なかなか難しいんです。最初の 3 ヶ月くらいは「何でこうなんだろう」と腹が立っていましたけど、そのうちむこうの人の考え方がわかってきて「なるほどなあ」と。それで、うまく溶け込むというか、確かに日本じゃこう考えるところだけれど、むこうの考え方もわかってくる。これは単なる語学じゃ駄目なんですよね。制度が長続きしているのは、そういうことなんじゃないかと考えます。 リモージュ大学の場合は、僕たちのところでは送るばっかりなんですよね。むこうから学生が来るということはないんです。単位の互換ということが、なかなかむずかしいんです。フランス人学生は、フランスで単位が認めてもらえないととても日本なんかに留学なんてできないと思っている人がほとんどですから。 それから、授業料のことがあります。むこうに行く時にどうするか、むこうは授業料がないわけです。3 万円程度の登録料だけですから、だったら日本の高校を終えたら積極的にむこうの大学に行けばいいじゃないかってことになるけれど、それをやっているのが今の中国なんです。中国は行けるところにどんどん学生を送っているんですよ。アメリカや日本は授業料をかなり取りますから、フランスとかヨーロッパにものすごく行っている。リモージュにも 200 人 位いると思います。毎年、フランス語をあまり知らないで来て、中国人は自分たちのところで塾をつくってフランス語を教えたり助け合いをしていて、それはそれですごいと思います。

授業料と言う時には、単なる大学との関係じゃ解決しないんですよね。やはり日本として学生を送るときは、フランスの税金でやっている教育制度を利用させていただくわけですから、どうしてもあっちから来ない場合は、何らかのお礼というか対価のようなものを、僕は古い人間ですから、考えなきゃいけないと思っています。それで考えたのが、むこうとの共同研究なんです。僕は祖語研究、祖語というのは、日本語のもとがどういうものか、インドヨーロッパ語のもっと古いものはどういうものかということに興味があるわけですけれど、それと同じような人がむこうにも

いたわけです。僕の友人がそうなんだけれど、その人と 2 人で編集をして、1年間に 1 回、フランス語の雑誌を出すことにしました。雑誌と言っても研究誌なんですが、その費用を全部こちらが負担しようということで、それでまあ、少ないけど残りはむこうの人にお世話になると。対価としては少ないと思いますけれども、それである程度のバランスは取れているんじゃないか、と。 日本人留学生を世話してくれる、ホストファミリーという制度がつくられました。フランスというのは土日というのはほとんど何もないんですよ。日本みたいに土日が賑わうということがまったくなくて、むしろ土日は、学生は自分の家に帰ってしまいますから下宿とか寮にいる人は何もできない。そういう留学生に、土日はウチに来て過ごしなさいという人がたくさん現れて、そういうホストファミリー制度も自然に形成されました。とてもありがたいことだと思っています。 それで、たまたまというか、名工大の留学生としては2人目という河村くんという人がいまして、この間、会ったんですね。すごく立派な人です。キチンとした人で、理科系の秀才という感じがして。みんなでビールを飲んだ後、河村くんと二人でちょっと食事をしながら話をしたんですけれども。こうした制度がたった一人ではもったいない、もっといろいろな人に開かれればいいんじゃないか、と思いました。それで、彼に「何語を使ってるんですか」と聞いたんです。彼はあんまりフランス語がうまくなさそうだったから。すると「いや、学校じゃ英語を使ってます」と。ENCI というのは、理科系のグランド・ゼコルのひとつですから、英語くらいはみなだいたいできるんですけれども。それでちょっと僕は「あ、もったいないなあ」と思ったんですけれどもね。あなたたちの中でもしもこういった状況になったなら、そこの言葉を知った方がずっといいですよ。そうすると、さっき言ったようにむこうの人の考え方がわかるし、その考え方というのが研究にも返ってくるんですね。僕はそうだと思います。 理科系の人で、言葉がとてもよくできる人がいたりする。名古屋大学に昔、豊田利幸という先生がいました。彼が僕たちの大学に定年後来られたことがあって、ちょっと話したことがあるんですが、豊田先生はイタリア語がおできになる。英語ももちろんできるんですが、「イタリア語は物理と何か特別な関係があるんですか」と聞いたら「まあ、ないんですけど、イタリア人の考え方というのはとってもおもしろいんだ」ということをおっしゃって、こういう人もいる、ああいう人もいるということで「ああそうか」と、非常に感心した覚えがあります。理科系だからこそ、英語以外の言語を覚えるべきなんです。ドイツに行く人はドイツ語で生活した方がずっといいし、ドイツ語を覚えた方が絶対いい。 英語はもちろん、ドイツ語やフランス語よりも楽でしょうけど、その土地の言葉を知ると、その土地の人たちの視線がま

ったく違う。フランスやドイツで英語だと、どうしても « お客さん »なんですよね。けれどもフランス語で言うと、対応が違うし、外国人という感じではなくなる。フランスではフランス語を喋る人がフランス人という感覚です。いろんな人がいても、フランス語を喋らない人が外国人。そこへ行って英語で暮らすことはできるけれども、1年近くむこうにいてフランス語を使わないというのはとてももったいないという気がします。みなさんは英語はもちろん知っているでしょうけれど、英語はどこだって通用するんですよね、商売とか、どういう場合でも通用しますけれども、気持ちは伝わらないんですよ、どうしても。その土地の言葉をなるべく、行く前にこっちで覚えなきゃいけない。英語は世界共通語という点はもちろんあるけれど、それを超えないと交流というのはとても難しいと思います。 アインシュタインという人がいますね。彼はもともとヨーロッパの人ですが、あの人の相対性理論というのは、彼は中学校の時に言語学者の家に下宿していたことに関係するという説があります。その言語学者といろいろ喋った。20 世紀の初めの頃というのは、ちょうど音声学 - 言語音声を物理的に分析して研究する - の時代から音韻学というのに移り変わる頃なんです。音韻学というのは、物理的には違う音でも言語のシステムの中では同じ働きをするものを追求する学問です。例えば、新聞という日本語を、「シ」と発音しようと「スィ」と発音しようとどっちでもいいわけでしょう。「スィンブン」ではちょっと変かもしれないけど、日本語としては音韻的に(つまり意味は)同じです。ところが音声的には違うんです、ものすごく違う。フランス語とか英語では、「シ」と「スィ」は違う音韻なんです。そういう音韻についての考え方を、彼は中学校の時に言語学者と話して知ったことが、あの相対性理論のもとにあるということを言っている人もいます。言葉というのはとても大事なんですよね。もちろん専門の知識は大事だけれど、新しい発想というのは思いがけないところからやってきますから。思いがけないところというのは、やはり今まで知らなかったもののなかに飛び込んでいって、そこでその人たちの考え方と自分の考え方を合わせて、そこから生まれるんじゃないかと僕は思っています。

司会 ありがとうございました。確かにですね、私どものプロジェクトでは、文化を基本として身につけていただいて、そこから研究所の発想を得たいという考え方がありまして、工藤先生がおっしゃるような考え方で進めていきたいと思っていますが。フランス語を私の今の歳から勉強するのはなかなか難しくて、残念でなりませんので。若い方たちには期待したいと思います。